

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520684

研究課題名(和文) 第二言語習得における言語知識と自発的産出に関する実証的研究 形態素習得からの考察

研究課題名(英文) L2 Learners' Linguistic Knowledge and Spontaneous Production of Morphological Features: Empirical Studies of Verbal Compounds and Plural Marking

研究代表者

庄村 陽子(一瀬陽子)(Shomura-Isse, Yoko)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：30368881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はある特定の文法項目において母語話者の言語知識が第二言語習得に与える影響の解明を目的とし、以下の二種類の研究を行った。(i)複合動詞研究では韓国語に統語的複合動詞が存在しないことに着目し、韓国人日本語学習者は複合動詞ではなく母語と同様の形式で産出することを実験により示した。(ii)複数形形態素に関する研究では日本語と英語の可算・不可算の統語・語彙レベルにおける相違に注目し、英語を母語とする日本語学習者は母語転移を示さず、その一方で日本語を母語とする英語学習者は統語上の可算・不可算の区別がない日本語の特徴を英語学習にも適用してしまい、複数形を過剰使用することを実験により示した。

研究成果の概要(英文)：We aimed to clarify how first language (L1) influences second language (L2) development, examining specific grammatical items. First, we studied L2 acquisition of Japanese syntactic v-v compounds by L1 speakers of Korean, which has lexical v-v compounds but not syntactic complex verbs. Korean speakers could produce lexical v-v compounds found in their L1, but not the syntactic v-v compounds in Japanese. We also examined L2 acquisition of plural morphology, where L1 English L2 Japanese learners and L1 Japanese L2 English learners were tested on knowledge of the plural markers “-tachi” (Japanese) or “-s” (English), respectively. Results showed L1 English speakers could successfully acquire -tachi, but L1 Japanese speakers had difficulty with -s, suggesting they overgeneralized the English plural, as Japanese lacks syntactic distinctions for countable/uncountable nouns. Taken together, these studies demonstrate how certain L1 grammatical features influence L2 language development.

研究分野：第二言語習得

キーワード：第二言語習得 母語の影響 複合動詞 複数形形態素 実証的研究 形態素 中間言語 普遍文法

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究における 90 年代前半までの最大の関心事はパラメータ値の再設定に関するものであり、主に GB 理論を基盤とした第二言語習得における UG の利用可能性に関する研究がさかに行われた。UG に基づく第二言語習得研究の役割の 1 つは“言語経験が貧弱でも獲得可能な普遍的特質と、学習段階の最後まで獲得が困難な領域を明らかにすることである”(遊佐 2013: 89)。言い換えれば、中間言語に母語の影響が反映されやすい領域と、母語に関わらず一般的に共通して見られる発達上の現象とを区別することにある。よって本研究で取り上げられる主たる問題点は次の 2 点に集約できる。

(a) 第二言語学習者の L1 ほどのように第二言語知識に影響を与えるのか。

(b) 母語話者と第二言語学習者との間における言語知識に関する違いは存在するのか。存在するとすればどのような側面においてその違いが現れるのか。

まず(a)に示されている点は第二言語学習者の言語知識の「初期状態」や「母語の転移」に関する問題である。母語学習者と第二言語学習者との違いは第二言語学習者には母語の文法の知識が既に存在するという点である。したがって第二言語知識の形成にあたり学習者の L1 が少なからず影響すると考えられるため、生成文法理論に基づく第二言語習得研究の多くは、第二言語学習における「初期状態」は学習者の母語文法であると仮定している(e.g. White 1985; Schwartz 1986)。過去に遡れば、70 年代当初から「母語の影響」に関する評価については様々な変遷があった。ある時期には誤用には「母語の影響」はほとんど存在せず、母語とは無関係に観察される「発達上の」誤用が大半であるとして、母語の影響が軽視されることもあった。しかしその後、Ellis (2008:402)による「第一言語転移の説明がなければ、第二言語の使用理論又は第二言語習得理論はいかなるものも完全なものとはなり得ない」という主張に象徴されるように、母語の影響の重要性が再認識されている。その理由は、従来は言語習得における包括的な習得理論の構築や、普遍性の解明に多くの研究者が力を注いできたが、結局母語の影響に関する議論を抜きにして第二言語習得のメカニズムを説明することはできないことに多くの研究者が再認識したことが一因だと考えられる。

次に(b)に関しては、これまでの先行研究を概観する限り、第二言語学習者が目標言語の母語話者と同等の言語能力を有することが可能であるかどうか合意には達しておらず、それが不可能であると主張する仮説も多く存在する。例えば Hawkins (2000)は、成人の第二言語学習者が、ある文法項目を習得しよ

うとする際、それがもし母語に欠如している習得は困難であると主張し、“Representational Deficit Hypothesis (RDH)”と呼ばれる仮説を提唱した。これは、かなり上級レベルの学習者ですら母語話者と同等の言語知識を持つことが不可能であるのはなぜかという疑問を、ある習得不可能な文法項目の存在を理由に説明しようとするものである。他方、Goad & White (2006)は“Prosodic Transfer Hypothesis (PTH)”を提唱し、ある文法項目が習得困難なのはある種の素性の習得が不可能なためによるものではなく、母語と第二言語の音律構造(prosodic structures)の違いに起因するものであると主張している。

2. 研究の目的

本研究の目的は上述の(a)、(b)で示されているように、第二言語学習者の言語知識が学習者の熟達度に応じ、どのような状態であり、どのような特色を持つのかを解明すること、さらには中間言語において母語の影響が反映されやすい領域と発達上の誤りが出現しやすい領域とを明らかにすることにある。研究目的の遂行にあたり、本研究プロジェクトでは以下の 2 種類の研究を実施した。

(1)研究 1: 日本語の統語的複合動詞に関して、その解釈と産出に焦点を当てて中国語、韓国語、英語の母語話者を対象に調査を実施した。複合動詞は一見すると 2 つの動詞の組み合わせに過ぎないようだが、上級の日本語学習者にも誤り(例:「吸い始まる」)が表れやすく、習得が困難な文法項目だとされる。森田 (1978)によると、学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞の大半は単純動詞であり、それらの動詞を組み合わせた複合動詞についてはほとんど学習の機会が無いのが現状である。それ故に明らかにすべきことは、母語の異なる日本語学習者が複合動詞のどの点に困難を見出すのか、そしてどのようなプロセスまたは中間言語を経て日本語話者と同じような複合動詞を産出できるようになるのかを探る必要があると考えた。

日本語の複合動詞は、その言語学的な観察事実から語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに大別される(影山 1993)。具体例を挙げると、「切り倒す」のような語彙的複合動詞は V1 の連用形と V2 とが直接併合したものであるのに対して、統語的複合動詞は「食べ続ける」のように V2 が V1 を主要部とする動詞句 (VP)を補部取るものである。日本語や中国語にはそれら両方の複合動詞があるとされているものの、韓国語には語彙的複合動詞のみが存在し、英語にはそのどちらも存在しないとされる(表 1 参照)。

表 1. 各言語における複合動詞の種類

| | 日本語 | 韓国語 | 中国語 | 英語 |
|---------|-----|-----|-----|----|
| 統語的複合動詞 | あり | なし | あり | なし |
| 語彙的複合動詞 | あり | あり | あり | なし |

(Hokari, Kumagami and Akimoto 2012: 162 を基に作成)

日本語で統語的複合動詞によって表される事象は韓国語では異なる方法で表される。例えば、(1a)のように日本語で統語的複合動詞として表される事象の V1 を韓国語では(1b)のように、V1 を名詞化することによって表現する。

- (1) a. 太郎が弁当を食べ忘れた。
b. 다로가 도시락을 먹는것을 잊었다
Taro-ka tosilak-ul mek-nun-kes-ul ic-ess-ta
T-Nom lunchbox-Accept-Rel-NMNZ-Acc forget-Past-Decl
直訳：太郎が弁当を食べることを忘れた

(1b)では、(1a)に示すように、日本語で「食べ忘れた」と表される統語的複合動詞が、「먹는것을 잊었다(直訳：食べることを忘れた)」というように V1 を名詞化させて表現することが示されている。また韓国語では、(2b)に示すように、「계속 (続けて)」が副詞のような役割を担い、本動詞を修飾する。

- (2) a. 太郎が弁当を食べ続けた。
b. 다로가 도시락을 계속 먹었다
Taro-ka tosilak-ul kyveysok mek-ess-ta
T-Nom lunchbox-Acc successively eat-Past-Decl.
直訳：太郎が弁当を続けて食べた。

以上の点から設定された研究課題は以下の通りである。

(3) 韓国語には統語的複合動詞がほとんどないため、韓国語を母語とする日本語学習者は産出課題や理解課題において、(1b)のように V1 を名詞化させたり、(2b)のように副詞を使用したりすることを好む傾向が観察されるのか。

上述の例のように言語学的見地から日本語、中国語、韓国語、英語の複合動詞の有無や類似性、違いなど入念に分析した上で、それらが学習者の中間言語に影響をもたらすのかどうか検証を進める。

(2)研究 2：第二言語習得における複数形の習得に焦点をあて、日本語母語話者による英語の複数形形態素「-s」の習得と、英語母語話者による日本語の複数形形態素「たち」の習得に関する双方向的調査を実施した。まず、英語の複数形形態素「-s」は可算名詞のみに使用され、不可算名詞には使用されない。英語の名詞における可算名詞と不可算名詞の区分にはいくつかの異なる分析があるが、この研究では、名詞の可算・不可算の区別は、語彙と統語のどちらのレベルでもなされ、指定に関しては可算のみで、不可算の指定はないとする分析(Barner & Snedeker 2005)を採用した。この分析においては、英語の可算・不可算の区別は以下の 3 つに分類される。(1) 語彙と統語の両方のレベルで「可算」指定を受ける名詞(cups や chairs など)、(2) 語彙と統

語のどちらのレベルでも可算の指定を受けない名詞(water や sand など)、(3) 語彙レベルでは可算の指定を受けるが、統語レベルでは可算の指定を受けない名詞(furniture や jewelry など)。(3)のタイプの名詞は統語的には不可算となるが、意味的には可算となる。このように英語は指し示す対象物が意味的には可算だが、統語的には不可算として振る舞うとされる名詞(furniture など)が存在し、語彙と統語のレベルで可算・不可算の指定が不一致になる名詞が存在する。日本語は統語レベルでの可算・不可算の区別が存在しない言語であるため、日本語母語話者においてはこの統語レベルでの可算・不可算の区別が特に難しいと予測される。本調査では、この予測を文法性判断テストと産出テストを用い調査する。

日本語の複数形形態素の習得においては、形態素「たち」についてその解釈に焦点を当てて、英語を母語とする日本語学習者を対象に調査を行った。日本語は可算名詞に単数形・複数形の区別を必要としない。しかし、日本語には生物名詞のみに対して複数形「たち」が使用されることがある。この「たち」という形態素は単に複数を表すのではなく、限定性(definiteness)、あるいは特定性(specificity)も表すと主張されている(Ishii, 2001; Hosoi, 2006, ほか)。この「たち」のもつ意味素性は英語の複数形形態素「-s」と大きくことなる。英語の複数形形態素は生物と無生物の両方に、そして特定・非特定に関係なく使用される。この調査では、英語母語話者が英語とは異なる複数形形態素「たち」のもつ意味素性を習得できるかどうかを調査する。母語転移が関与することを仮定すると、英語母語話者は日本語の複数形「たち」を生物・無生物の両方に、そして特定・非特定に関係なく使用すると予測される。

3. 研究の方法

(1)研究 1:日本語の統語的複合動詞の習得

◆実験 1：九州の大学に在籍する韓国語を母語とする日本語学習者 32 名と統制群としての日本語母語話者 21 名の計 53 名の被験者が参加した。習熟度テストの結果を基に、韓国語を母語とする日本語学習者を上位グループ (n=17)と下位グループ (n=15) とに分けた (p<.001*)。今回の調査で中心的なタスクは「クローズテスト」と「文法性判断タスク」である。それらの導入にあたり「自他の区別に関するテスト」も併せて実施した。

◆実験 2:日本の専門学校に在籍する韓国語を母語とする日本語学習者 48 名と、日本の大学に在籍する中国語を母語とする日本語学習者 48 名を対象とした。まず習熟度テストの結果を基に、韓国語母語話者と中国語母語話者をそれぞれ上位グループ(韓国人 n=23, 中国 n=24)と下位グループ(韓国人 n=25, 中国人 n=24)とに分けた。次に「自他の区別に関

するテスト」を実施した後に「空所補充課題」、「文法性判断タスク」を実施した。

(2) 研究 2: 第二言語における複数形の習得

◆**実験 1**: 平成 24 年 5 月から 8 月にかけて、まずは予備調査として日本語を第二言語として学ぶ英語話者 16 人を対象に「たち」の使用について調査した。(被験者は日本語習熟度レベルが初中級レベルから上級レベルの学習者である。) 英語では複数形態素は可算名詞に必ず伴われるが、「たち」は特定性のない名詞には使用されない。予備調査では、学習者が複数を表す可算名詞に、特定性があるかどうかに関わらず「たち」を使用するかどうかを調査した。

◆**実験 2**: 本テストでは、「たち」が特定性のある名詞にしか使われない、という要素に加え、総称的な名詞(generic nouns)には使われない、という二つの要素が習得可能であるか、について調査し、学習者の「たち」の解釈を検証する。本研究では、第二言語としての日本語習得に対する理解を深めるとともに、学習者が自らの母語に存在しない単数/複数数の概念を表す形態素が習得可能であるかを検証する。また習得可能であるとするとその発達過程はどのようなものであるかを明らかにするものとなる。

◆**実験 3**: 日本語を母語とする中級英語学習者に対し、英語の複数形態素「-s」の使用と産出について調査した。名詞は 3 つのタイプに分類された: (1) 語彙・統語レベルで「可算」(cups, chairs, etc.)、(2) 語彙・統語レベルで「不可算」(water, sand, etc.)、(3) 語彙レベルで「可算」、統語レベルで「不可算」(furniture, jewelry, etc.)。日本人英語学習者によるこれら 3 つのタイプの名詞に対する複数形態素の使用について調査した。

4. 研究成果

(1) 研究 1:

◆**実験 1**: 自他の区別に関するテスト及びクローズテストの結果において、単純動詞の自他に関しては正しく産出できた韓国語母語話者日本語学習者でも、統語的複合動詞の自他に関しては誤った産出をしている結果が観察された(例: 私はお菓子を食べて続いた、私はケーキを食べ止んだ等)。一方、単純動詞の自他を正しく産出できなかったグループの被験者は、統語的複合動詞も産出できなかった。この帰結は、陳(2010)のコーパス研究により導出された「統語的複合動詞においては自他の組み合わせに関する誤りが多い」という報告を支持するものであると言える。また、(3)の研究課題に関して、韓国語母語話者日本語学習者の中には、韓国語の影響により、日本語で「ケーキを食べ続けた」と産出すべきところを、「ケーキを続けて食べた」と産出した被験者が見られた。ただし、今回の実験では韓国語以外の母語話者を対象に含めていないため、これが韓国語母語話

者特有のものであるかどうかは検証する必要がある。

次に文法性判断タスクの結果において(1b)のように V1 を名詞化する現象が見られるか」という問いに関する文法性判断タスクの結果は、韓国人話者の上位、下位グループ共に、韓国語で V1 を名詞化できるものに関しては、複合動詞よりも名詞化の方を好む傾向が観察された。具体例を挙げると、韓国語で V1 が名詞化される動詞(例: 忘れる)に関して、統語的複合動詞(例: キムが弁当を食べ忘れた)ではなく、名詞化(例: キムが弁当を食べることを忘れた)を好む傾向が見られた。

◆**実験 2**: 韓国語母語話者、中国語母語話者を対象とした統語的複合動詞の産出実験では、中国語母語話者はほとんど誤りがなかったのに対し、多くの韓国語母語話者は統語的複合動詞の形式を作れず、本来 V2 に用いる動詞を副詞のように用いる場合があることが判明した。具体例では日本語の複合動詞「食べ続ける」と回答すべきところで「*続けて食べた」といった「副詞+動詞」型の誤りが観察された(下位集団 50 名中 22 名が産出)。複合動詞の第二言語習得研究における先行研究では、複合動詞の習得で見られる学習者の誤りの大半は、主に V2 の自他に関するもの(例: 吸い始まる)が報告されている(陳 2010 他)。申請者らが報告した「副詞+動詞」型の誤りは、複合動詞の第二言語習得研究に新たなデータを提供したことになる。韓国語では「食べ続けた」という表現の代わりに「続けて食べた」と表現するため、今回の誤用は母語の転移ではないかという予測が立つ。

(2) 研究 2:

◆**実験 1**: 予備調査では、学習者が複数を表す可算名詞に、特定・非特定の名詞のどちらにも「たち」を使用するかどうかを調査した。結果は、一部の初・中級レベルの学習者を除き、学習者は複数可算名詞に必ず「たち」という形態素を加えることはないことが明らかになった。この結果は学習者が自らの第一言語にはない複数形態素「たち」の特性を習得していることを示している。

◆**実験 2**: この調査では、学習者が「たち」を特定性の伴う名詞のみに用い、非特定名詞や総称名詞には用いないかどうかを調査するものである。実験結果によると、中級・上級レベルの学習者の多くは、「たち」が特定性を持つことを習得しており、非特定名詞や総称名詞に対しては「たち」が使用できないことを習得していた。従って、この実験からは母語転移は観察されなかった。

◆**実験 3**: この調査では日本人英語学習者が前述の 3 タイプの名詞に対する複数形態素の使用を調査するものである。結果によると、学習者は語彙・統語レベルで「可算」名詞に対しては正しく複数形態素を用い、語彙・

統語レベルで「不可算」の名詞に対しては複数形は用いない傾向が顕著に表れた。しかし、語彙レベルで「可算」、統語レベルで「不可算」の名詞に対してはすべての中級レベルの学習者が文法性判断テストと産出テストの両方において複数形を過剰使用することが明らかになった。従って、学習者の第一言語である日本語において統語レベルでの可算・不可算の分類が存在しないことにより、統語レベルでの誤りが観察されたとと言える。さらに、複数形態素を過剰使用されたのは、(3)のタイプの名詞だけで、(2)のタイプの名詞に対しては過剰使用がなかったことを考慮すると、日本人学習者は語彙レベルでの可算・不可算の区別を統語レベルに適用していることが明らかになった。この実験結果から、複数形の過剰使用は、日本語は統語レベルでの可算・不可算の区別がない言語であるため生じる文法的誤用であることが示唆された。

まとめ

本研究課題において、学習者の母語と目標言語を比較し、母語転移を引き起こすいくつかの統語的項目に焦点をあてて調査をおこなった。統語的複合動詞の習得に関する調査においては、統語的に複合動詞を形成する構造をもつ言語が母語の学習者(中国語話者)と持たない言語が母語(韓国語話者)の間での相違が観察された。これは母語転移によって表れた学習者の母語による相違と言える。今後の課題としては、さらに語彙的複合動詞の習得に関する言語間の分析を行い、それを踏まえた調査を実施することが挙げられる。また対象言語も韓国語と中国語に限定せず、英語を含むヨーロッパ言語にも目を向けていきたいと考えている。

次に複数形の習得に関する研究においては、日本語の複数形の習得においては、中級レベルの学習者の多くが既に「たち」のもつ特定素性を習得していたと考えられる。これは一見すると母語転移が見られなかったとも考えられるが、一方で「たち」の特定性の習得は中級レベルではなく初級レベルで習得されるものとも考えられる。従って、今後、初級レベルの学習者に対しても調査し、明らかにする必要がある。日本語母語話者による英語の複数形の習得に関する研究においては、日本語にはない統語レベルでの可算・不可算の分類が日本人学習者には困難で、語彙レベルでの可算・不可算の区別がそのまま統語レベルで適用されることが示唆された。この調査により、英語の可算・不可算の区別においてどの領域が困難であるかが明らかになった。つまり、日本語母語話者にとって困難な区別とは、語彙レベルと統語レベルでの区別に不一致があるものに限られ、語彙・統語レベルで可算・不可算の区別が一致しているものにおいては習得が容易であることが明らかになった。今後は、第二言語学習者にとって可算・不可算の統語レベルの習

得が可能なのか、また可能であるとする学習者の習熟レベルやその他の学習者要因はどのようなものであるかなど、調査を続ける。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

①Snape N., Umeda M., Wiltshier J. and Yusa N., Teaching the Complexities of English Article Use and Choice for Generics to L2 Learners., Proceedings of Generative Approaches to Second Language Acquisition, 査読有, Vol. 13, (In press)

②Umeda M., L1 Transfer of the Mass-Count distinction in Japanese-English interlanguage., 群馬県立女子大学紀要, 査読無, 第 36 号, 2016, pp.93-109,

③團迫雅彦, 一瀬陽子, 木戸康人, 「韓国語母語話者による統語的複合動詞「V 始める」の習得について」, 福岡大学言語教育研究センター紀要, 査読有, 第 14 号, 2015, pp.11-25,

④團迫雅彦, 福岡市方言における同意要求表現「クナイ」の形態, 統語, 意味的特性, 台湾日本語文學報, 査読有, 第 38 号, 2015, pp. 75-98,

⑤團迫雅彦, there 構文における DP の定性制限と言語獲得, 九州大学言語学論集(KUPL), 査読無, 第 36 号(坂本勉教授追悼号), 2015, pp. 197-208,

⑥一瀬陽子, 木戸康人, 團迫雅彦, 「韓国人日本語学習者における統語的複合動詞の習得」, 福岡大学人文論叢, 査読無, 第 47 巻, 第 2 号, 2015, pp.453-475,

⑦Kido Yasuhito, Masahiko Dansako and Yoko Isse, On the Syntactic Complex Verbs in Japanese and Korean, JELS, 査読無, Vol. 32, 2015, pp.262-268,

⑧Umeda M., Interpretations of bare nouns and the plural marker -tachi by English-speaking learners of Japanese., 群馬県立女子大学紀要, 査読無, 第 35 号, 2015, pp.167-184,

[学会発表] (計 11 件)

①Snape N., Umeda M., Wiltshier J. and Yusa N., Do SLA findings on meaning translate to the L2 classrooms?—the case of articles., European Second Language Association 第 25 回大会, 2015 年 8 月 26 日, マルセイユ(フランス)

②團迫雅彦、英語を母語とする幼児の there 構文における定性制限について、JSLs 2015 言語科学会第 17 回年次国際大会、2015 年 7 月 19 日、別府国際コンベンションセンター (大分県・別府市)

③Snape N.、Umeda M.、Wiltshier J. and Yusa N.、Teaching the Complexities of English Article Use and Choice to L2 Learners. Generative Approaches to Second Language Acquisition 第 13 回大会、2015 年 3 月 6 日、Bloomington(米国)

④團迫雅彦、同意要求表現「クナイ」の終助詞化と意味的性質について、2014 年度台湾日本語文学国際学術研討会、2014 年 12 月 20 日、新北市(台湾)

⑤團迫雅彦、DP の定性制限とその獲得について、第 67 回日本英文学会九州支部大会、2014 年 10 月 26 日、福岡女子大学(福岡県・福岡市)

⑥團迫雅彦、一瀬陽子、木戸康人、韓国語母語話者による統語的複合動詞「V 始める」の習得について一母語の影響を中心に一、日本語教育学会 2014 年秋季大会、2014 年 10 月 12 日、富山国際会議場(富山県・富山市)

⑦Mari Umeda、L2 Acquisition of the Japanese plural marker -tachi、European Second Language Association 第 24 回大会、2014 年 9 月 5 日、York(英国)

⑧一瀬陽子、木戸康人、團迫雅彦、韓国語母語話者日本語学習者における統語的複合動詞の習得、言語科学会第 16 回年次国際大会、2014 年 6 月 28 日、文教大学(埼玉県・越谷市)

⑨Kido Yasuhito、Masahiko Dansako and Yoko Isse、On the Syntactic Complex Verbs in Japanese and Korean.、日本英語学会国際春季フォーラム 2014、2014 年 4 月 20 日、同志社大学(京都府・京都市)

⑩團迫雅彦、上昇調文末表現「～くない」の文法化と統語構造、日本言語学会第 147 回大会、2013 年 11 月 24 日、神戸市外国語大学(兵庫県・神戸市)

⑪團迫雅彦、言語獲得過程における空主語現象と統語構造、日本英文学会九州支部大会、2013 年 10 月 26 日、鹿児島国際大学(鹿児島県・鹿児島市)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]
○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

[その他]
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者
庄村(一瀬) 陽子(SHOMURA-ISSE, Yoko)
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：30368881

(2) 研究分担者
梅田 真理(UMEDA, Mari)
群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・講師
研究者番号：80620434

團迫 雅彦(DANSAKO, Masahiko)
九州大学・人文科学研究院・専門研究員
研究者番号：50581534

(3) 研究協力者
木戸 康人(KIDO, Yasuhito)
神戸大学大学院・人文学研究科・博士課程後期